

じいく
地獄に行つた吉兵衛さん

(滋賀県)

むかし、あるとこに、吉兵衛さんという人がいました。いつもおもしろいことばかりして、気楽に暮らしていました。そのうちそれにもあきて、何かもつと変わつたことをしたいなあと思うようになりました。

あるとき、吉兵衛さんは、ふと、首つりをしてみようかと思いました。

「いい」とに気がついた。これはきっとおもしろいぞ」

吉兵衛さんは得意になつて、家のうらの柿の木に細いなわをかけました。そして、台に上がつて、

（いよいよ苦しくなつたら、なわをちょっとゆるめよう）と考えて、なわで首をくくりました。台をポンと勢いよくあきらめることにしました。そのとたん、なわが切れて、ドスンと落ちてしましました。見ると、足の下に道がずうつと続いていました。

「ええい、かまわん。行ける所まで行くぞ」

吉兵衛さんは、あてもなくどんどん歩いていきました。すると、道がふたつに分かれている所に来ました。

「どちらに行こうかなあ」

よく見ると、いっぽうの道はきれいな道で、もういっぽうの道は草が生えて石がうるうるしていました。吉兵衛さんは、きれいな道が極楽道だろうと思つて、そちらの道を歩いていきました。ずんずん行くと、がんじょうな門がありました。それは、地獄の入り口でした。きれいな道が極楽道だと思つたのはまちがいでした。地獄は、行く者が多いので草が生えるひまがなく、極楽は、行く者が少ないので、草がおいしげつていたのです。

けれども、吉兵衛さんは、引き返すのもめんどうなので、なるようになれど、地獄の門をドンドンたきました。すると、中から、

「だれだ」とどなる声がしました。

「吉兵衛です」

「吉兵衛が来るのはまだ早い。帰れ」

「でも、死んだので、来たんです。開けてください」

やつと門が開きました。吉兵衛さんが中に入ると、うしろでぴしゃんと門がしまりました。目の前に強そうな鬼が立っていました。吉兵衛さんは、やっぱり来るんじやなかつたと思いましたが、まさらどうしようもありません。

鬼は、吉兵衛さんをうす暗い部屋に放りこんで、

「そのうち閻魔さまのお調べがあるから、それまでここで待つておれ」といつて、行つてしましました。ところが、つぎの日もお調べはありません。そのつぎの日、吉兵衛さんが、（なんとかしてここをぬけだして、もういっぺん生き返りたいなあ）と考えていると、赤鬼やら青鬼やら黒鬼やらが先に立つて、ようやく閻魔さまがやつて来ました。

吉兵衛さんは、ちょっとと考えてから、いちばん前を歩いてくる赤鬼のそばへちよこちよこと行つて、何やら耳打ちをしました。すると、赤鬼は、急にお腹まをかかえて、ひっくり返つて笑いました。吉兵衛さんは、こんどは青鬼のそばへ行つて、また何やら耳打ちをしました。すると青鬼もころげまわつて笑いました。そうやつて、吉兵衛さんが耳打ちをすると、鬼はみなつきつぎに笑いだし、とうとう閻魔さままでが笑いころげました。地獄じゅうが大笑いしているあいだに、吉兵衛さんは、いちもくさんに地獄から逃げだして、家に走つてかえりました。

吉兵衛さんの家では、もう吉兵衛さんのお葬式そうしきもすんで、きょうは、大勢おおぜいの人が集まつて法事をしているところでした。そこへ吉兵衛さんが飛びこんできたから、みんなはびっくりしました。

「吉兵衛、おまえどうしたんだ。どこへ行つてたんだ。どうやつて帰つてきたんだ」

みんなが口々にたずねると、吉兵衛さんはいました。

「いや、なんでもない。地獄へ行つたんだけど、帰りたくなつてね。鬼に話をしたら、ひどく笑いだしたので、そのあいだに逃げてかえってきたのさ」といました。

「へえ、鬼にいったいなんの話をしたんだ」

みんながたずねると、吉兵衛さんは、笑つていました。

「来年のことを、ちょっと話しただけさ」

おしまい

- * 極楽道　　極楽へ続く道。「極楽」は、この世のすべての苦しみをはなれた安樂の世界のこと。じようど　淨土ともいう。
- * 閻魔さま　　生きていたときの行いを審判しんばんして、死んだ人に賞罰しょうばつをあたえる地獄の王。
- * 法事　　人がなくなつたあと、しのんで行う儀式ぎしき。
- * 来年のことをちょっと話した　　見通しのはつきりしないことをいつたとき、「鬼が笑う」とからかう」とわざがある。

出典 『語りの森昔話集2ねむりねっこ』村上郁再話／語りの森